外なる神とＩＳ

吼狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
外なる神とＩＳ

【Ｎコード】
Ｎ６９２３Ｚ

【作者名】
吼狼

【あらすじ】
それは現在か過去か未来か・・・その果てで戦い流れ着いた神がいた。
名も無き外なる神は赤城志熊（アカギシグマ）と名乗ってある世界にたどりついた。
その世界はＩＳ・・インフィニットストラトスというマルチフォームスーツが活躍する世界だった。
そのＩＳが活躍する世界にあるＩＳ学園、そこに織斑一夏とともに入学しなにを成すのか？

これはＩＳとオリ主のクロスです。
また、デモンベインやガンダムＡＣシリーズやスパロボＯＧから機体や言葉が出てきますのでご了承ください。
あとは少しクトゥルフ的なのも出ると思います。
それでもよろしければお楽しみください。
更新は不定期になると思います。

プロローグ（前書き）

始めまして、吼狼です。

書きたくなって書いてみました。

よろしければ呼んでみてください。

あと、処女作で手探りな感じになりますのでご了承ください。

プロローグ

それは戦っていた・・・・

とあるソンザイを眠らせるために・・・・・

全てを賭けて・・・・

「ちっ・・ナイアルラトホテプ！」

それはナイアルラトホテプと呼ばれる一柱の神に問いかけていた。

「くっ、まさかここまでとはね・・・わたしという化身のうちのどれかが起こした事とは言え・・面倒ね。でも、そろそろ来るはずだから・・・・・来た！！」

ナイアルラトホテプがそう言うと・・・

「ふぅ、やっとアザトースを眠らせるため事ができるか・・しかし・・・まさか協力者があいつらとはな・・・・」

「そうね、あなたにとっては同窓会かしらね？最も新しい外なる神？」

「そう・・だな・・あと、俺の名前を早く決めないとな。」

そう、その最も新しい外なる神は名前が無かった。
理由はこの外なる神は元は人間だったが、ある事故の後に名前を捨てたのだ。
だから、今のその神に名前がないのだ。
その人から神になった経緯はそのうちに語られるだろう・・・
「ふむ、まさかここまでの事態とはね」
その紳士の様に話す長い金髪にオールバックの彼は６対１２枚の翼を持つ魔王と呼ばれる存在、名をルシファーと言った
「こんな事になってるのかよ・・・早く止めないとまずいな。」
もう一人は黒い髪を肩くらいまで伸ばし、赤と青のオッドアイの男・・彼が最も新しき旧神と呼ばれる大十字九郎という。
「汝らが居ながらなんという体たらくだ！」
小柄だが、長い銀髪の少女の名はアル・アジフという。
「とは言っても他の化身のことまでわたし達は分からないよ？」
ナイアルラトホテプは少し不満そうに言うが・・・
「それをなんとするのが汝らの役目だろう！」
アル・アジフは怒鳴る、そこへ九郎とルシファーが

「少し、落ち着くといい、これでは勝てる戦いも勝てなくなるよ？」

「そうだぞ、アル、這い寄る混沌がちゃんと仕事できるわけないんだしな。」

アル・アジフはそれに渋々納得したのか

「まぁ、這い寄る混沌が使えないうえに迷惑なのは今に始まった事じゃないからな・・・」

「あれ？これって私泣いていいですか？」

と言いながらすでに泣いているナイアルラトホテプなのだが・・・

「漫才はそこまでにしとけ・・・来るぞ！！」

最も新しき外なる神が警告する。

それと同時に沸騰したような混沌としたナニカがこちらに迫ってきた。

「ちっ！」

全員がそれぞれ散らばる。

「奴らも呼ぶか・・・ハスター！！クトゥグア！！」

そう叫ぶと突然六亡星の魔方陣のようなものが浮かび上がり、そこから黄色の衣を羽織り仮面を付けた長身の人のような神と燃え滾る

猛悪な太陽のような神が姿を現した。

「主よ・・・なぜ奴がここにいる！！」

クトゥグアが叫んだ。

「仕方ないじゃないですか、そういう状況なのですから」

ナイアルラトホテプがそう言う。
実はナイアルラトホテプとクトゥグアは仲が悪いどころか天敵という関係である。
ちなみにハスターはクトゥルフと言う神と仲が悪かったりする。

「我慢しろ、それだけ切羽詰まってる状況なのだ・・・」

そう言ってなだめる？最も新しき外なる神に

「仕方ない、主の命令だからな・・・だが、いずれ消し去ってくれる！！」

クトゥグアそう言うと

「それは遠慮します。」

と微笑を浮かべるナイアルラトホテプであった。

ちなみにそんなやり取りをしているとハスターが、

「準備できたそうだ、作戦は単純に我らの最大火力を叩き込めばいいとの事だ。

ただし、九郎はシャイニングトラペゾヘドロンを直接使用するなとの事だ」

「了解、んじゃ、みんないっちょ行きますか！！」

「「「「「応！！」」」」」

まずは最も外なる神が

「インフィニティ・インパクト！！」

文字通り無限衝撃を相手に叩き込み相手を消滅させる技だ。

次にナイアルラトホテプが

「這い寄る混沌・・・」

自らの二つ名にもなっている技で能力は全てを侵食する（当然空間や概念すらも）

指向型術式である。

次はルシファーで

「原初の闇・・・そして・・・生み出せ！！無限熱量と無限零度！！」

これはルシファーの誇る最大級の技で結界内で無限熱量と無限零度を交互に発動させ相手を消滅させる技である。（つまりは熱膨張のすごいバージョン）

最後は大十字九郎とアル・アジフとそして翠色の髪をもつ機械神デモンベインによる。

「レムリアインパクト・アインソフオウル！！」

これはあらゆる世界から（あらゆるというのはそれこそ平行世界はおろか過去、そして未来や可能性の世界からも）召還し、その全てで無限熱量と無限重力を放つレムリアインパクトを叩き込む技だ。

それに呼応しハスターとクトゥググアが窮極の風と窮極の火を叩き込む

「・・・・・・・・」

いきなりアザトースの気配が変わった。

「眠った・・・か？」

ナイアラルトホテプがそう言った・・・だが・・・

「・・・！まだだ！！」

九郎が叫ぶ。

「これでは間に合わない！」

ルシファーでさえも焦る。

「これを使うしかないか・・・まぁ、力をそれなりに失うがそれでも皆消滅よりはマシだ。」

最も新しき外なる神の一言にナイアルラトホテプが

「そんな！！それは使ってはいけない技ですよ！！！」

「なら・・他に方法はあるか？」

外なる神の一言にうっと言って黙るナイアルラトホテプ

「やるか・・・皆は退避していてくれ。」

皆が頷くと退避を始めた。

「・・・・全ての滅びを従えし滅び！！」

その瞬間にナニカが起きたそれと同時に最も新しき外なる神は消えた・・・

「ここは・・・？」

最も新しき外なる神はそう言うと・・

「気がつきましたか？」

「ナイラルラトホテプか？」

「はい・・・その世界は地球がたどる世界の一つのようです。
今、情報とあるものを送ります。」

「あるもの？」

疑問に思う外なる神に・・

「はい、ＩＳと呼ばれる物です。
まぁ、いろいろ強化しすぎて可笑しな事になってますが・・・役には立つはずです。
それが今あなたのいる世界で盾として剣としてそして翼となります。
私達は今あなたの影響でその世界にこれ以上干渉できないのであとはよろしくお願いします。
まぁ、７０年もすれば力も元に戻るはずですから。」

ナイアルラトホテプからの念話？が切れた。

「・・・とりあえず、情報は・・・確かに平行宇宙のどのあたりとか宇宙の時間とか必要と言ってもそれ以外にもいろいろあるだろ・・・文化とか常識や歴史の情報が一切ないのは嫌がらせか？」

考えても仕方ないとばかりに動こうとすると

「そこのお前、何をやっている？ここはＩＳ学園の敷地内だぞ、どうやって入った？」

ＩＳ学園・・・そういえば奴が先程ＩＳがどうの言ってたな・・・まぁ詳しく知らなければ意味ないが・・・聞いてみるか

「すまないが、ＩＳ学園とはなんだ？」

と後ろを振り向くと黒い髪を腰のあたりで縛ったつり目の女がいた。スタイルは胸が大きくそれ以外は無駄な肉がないというモデル顔負けであった。（顔も美人である）服装はスーツでとても似合っていた。

「ＩＳ学園を知らない？ふざけているのか？」

その女性の反応に

「ふざけてなどいない・・・まぁ、事情を話しても構わないが荒唐無稽で信じられんぞ？」

最も新しき外なる神がそう言うと

「とりあえず、着いてこい・・・話はそれからだ。」

女性はそう言うと

「あぁ」

短く返事をした。

しばらく着いていくとある部屋に入った。
そこは一面が白に塗られた壁にパイプイスとテーブルという質素は部屋だった。

「さてまずは自己紹介だ・・私の名前は織斑千冬という、このＩＳ学園で教師をしている者だ。
早速だ貴様は何者だ？」

俺には名前がない・・・どうするか・・まぁ、真名は後に考えるとしてこの世界ではこう名乗るか・・・
神なった後から使い始めた偽名で・・・

「俺の名前は赤城志熊だ。」

千冬「赤城シグマだな。」

志熊「違う、カタカナではなく漢字で志熊だ。」

千冬「冗談だ、それでは質問を開始するいいな？」

志熊「あぁ、初めてくれ。」

千冬「ではお前は今までどこにいた？」

アザトースの庭なんて言っても仕方ないな・・・よし、多分あの町はあるだろう。

志熊「アメリカのアーカムって町に住んでいたが？」

千冬「アーカム？ちょっと待ってろ・・・・そんな町はないぞ？」

志熊「なに？あんなでかい町が無いだと？何かの間違いではないのか？」

千冬「正直に答えてくれ、お前はどこに住んでいた？」

志熊「アーカムだが？アーカムシティだ」

千冬「いい加減にしろ！！そんな町は存在しない！！！」

志熊「そう・・か」

千冬「どうした？」

志熊「これは荒唐無稽な仮説だが聞いてくれるか？いや、多分真実だろう・・・その証拠も見せてやる」

千冬「なんだと？言ってみろ」

志熊「それを話すにはまずは俺の身の上を話さなければならない、（もっとも、真実は話さんが・・・）お前は魔術師を信じるか？」

千冬「そんなものいるわけないだろ？」

志熊「俺はその魔術師だ、と言っても普通の魔術師ではなく外道の知識を使い外法を操り外道を狩る魔術師なわけだが・・・」

千冬「それで？」

志熊「俺はここに来るまでその魔術師を倒そうとしていたわけだが・・・倒したはいいがその時に敵の術でこちらに飛ばされたらしい」

千冬「馬鹿な」

志熊「なら、俺の魔術を見ればいい」

さて・・・どの術でいくか・・・やはりここはあれだな

志熊「旧神の鍵起動！」

そう言うと空間から一冊の本が出てくる。
ちなみに志熊は魔導書を何冊も持っている、ただしそれはオリジナルと瓜二つな写本であるが・・・（ちなみに改変とかが一切無いためオリジナルと同等の力がある）旧神の鍵は魔導書のなかでネクロノミコンを越えるといわれる魔導書である原本は石版でかの外なる神ウボ・サスラのいる場所に散らばってたとされるものである。

志熊「さて、使う術式は・・・暴餓龍！！」

暴餓龍（作者オリジナル魔術）
名前から連想される術とはちょっと違ってあらゆる種類の武具を創造できる。
本来は邪神や魔王を喰らい尽くすための滅神兵器であり、体内で眷属や武具を作り運用する空母にしてプラントのようなものである。
顕現すると地球クラスの惑星の文明など一瞬で滅ぶ。

志熊「さて、作るのは・・・ナイフでいいか・・・」

そう言うと一本の禍々しいナイフが現れた。

千冬「！！な・・んだ・・これは・・」

志熊「これで分かっただろう？触るなよ？魂が汚染されるぞ？」

千冬「なるほどな・・・」

志熊「それではこちらの質問だ・・この世界の歴史や情勢を教えれくれ、あとは常識もか・・」

千冬「あぁ・・まずはＩＳつまりはインフィニット・ストラトスというのだが知っているか？」

志熊「知らんな・・・」

千冬「篠乃之束博士が開発した宇宙空間用マルチフォームスーツだ、もっとも宇宙開発は頓挫してしまったが・・そして、１０年前に白騎士事件という事件が起きその際に２０００発以上のミサイルを全て迎撃し、さらにその白騎士確保に動いた軍を一人の死者を出さずに全滅させるという事件を起こし、その後ＩＳは戦闘機や戦車に変わり君臨することになった。
だが、ＩＳは女性にしか扱えないという欠点により女尊男卑の世の中となってしまった。
さらに篠乃乃博士は４６７個以上のＩＳのコアを作るのを拒否しており現在世界はその今あるコアだけでやりくりしているというのが現状だ。」

志熊「なるほど・・・（ふむ、まぁ機械神ほどは強くないだろう・・・脅威とはならんだろうが・・）

それで俺はどうなる？」

千冬「先程押収したものの中にＩＳがあった・・あれはお前のか？」

志熊「そう・・だな・・（ナイアルラトホテプが用意したやつだし多分俺のだろう）」

？「織斑先生？ちょっといいですか？」

緑色の髪に童顔で背が低いとどう見ても子供にしか見えない女性が入ってきた、胸は平均より上なのだがあとは眼鏡か・・・

千冬「どうした山田君？」

するとその山田と言う女性と目が合った。

山田「始めまして、山田真耶といいます。」

志熊「始めまして、赤城志熊だ、よろしく頼む。」

千冬「それでどうしたんだ？山田君？」

真耶「そうでした、赤城さんのＩＳなんですが・・・全然解析できなくて困ってたんです。」

千冬「ふむ、赤城は何か分かるか？」

志熊「多分、魔術のせいだろうな・・・無理に解析すれば良くて山田さんの発狂や死亡で悪ければこの周囲が汚染されてしまうだろうな。

もっとも、解析は出来ないだろうが・・・・」

千冬「そうか・・・なら、こうするしかないな・・・」

志熊「なんだ？」

千冬「いきなりだが、お前にはＩＳ学園に入ってもらう」

志熊「なるほどな・・・監視ってわけか」

千冬「それにＩＳ学園はあらゆる国家や企業に属さないとなっている、３年間身の振り方を考えるといい」

志熊「・・・まて、よく考えればＩＳ学園は女子高だよな？俺は一応男だぞ？」

千冬「それについては問題ない、もう一人男がＩＳ学園に入学するからな」

志熊「なに？どんな奴だ？」

千冬「織斑一夏、私の弟だ」

志熊「そうか・・・（この年で学園生活とは・・・）」

こうして最も新しき外なる神こと赤城志熊はＩＳ学園に入学することになった。

入学式（前書き）

早速書いてみました。

読んでみてください。

入学式

いきなりだが俺はそれなりに緊迫した状況下にある、もっともそれは隣の奴もそうなのであろうが・・・

真耶「全員揃ってますねー？それではＳＨＲ始めますよー」

返事は無いようだ。

俺はちなみにそれどころではない・・・クラスの女子の視線を俺たちに向かっているからだ。

真耶「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」

志熊「あぁ、こちらこそよろしく頼む。」

今のは話を流すために無意識のうちに出てしまった言葉のようだが・・・

真耶「はいっよろしくお願いします！」

山田先生には喜んでもらえたようだ、だからといってこちらの状況が好転するわけではないのだが・・・

真耶「じゃあ、自己紹介を出席番号順でお願いします。」

ちなみに俺はすでに意識を夢の世界に飛ばそうとしてる、いろいろ面倒になったからだ。

真耶「・・かぎくん？赤城君？」

志熊「どうした？何かあったか？」

真耶「あのね、今みんなで自己紹介してて今赤城君の番だから自己紹介して欲しいなって？ダメかな？」

志熊「あぁ、なるほどな、さてどうするか・・・」

真耶「嫌だった？嫌だったかな？」

声も沈んで泣きそうになる山田先生、こんなんで本当にいいのか？と少し思ったが・・・

志熊「赤城志熊だ、一応１９歳だが気にしないでくれ、敬語とかは無くて構わない。一年間よろしく頼む。」

女子から視線を浴びながら

志熊「以上だと言いたいが・・それでは納得しないだろう？だから・・そうだな２つまでまずは質問に答えよう。」

すると、ハイハイハイ！！と次々に手が上がる。

志熊「なら・・・そこの君」

女子Ａ「赤城の趣味はなんですか？」

志熊「ふむ・・・趣味ってほどではないが釣りをするぞ。あとはゲーセンで遊んだりもするな」

志熊「次は君にするか」

女子B「どんな女性が好みですか？」

志熊「・・・・わからん、すまんが俺は今まで諸事情により忙しくてそんな事考えてる暇が無かったからな・・・この3年間で分かれば御の字と言ったところか・・それでは以上だ、他に何かあれば俺に支障が出ない限りで聞きに来てくれて構わん」

そして、席に着く・・・あいつは大丈夫だろうか？見本をみせたが・・・

真耶「・・・君？織斑一夏君？」

一夏「は、はい！？」

声裏返ったな・・・まぁ、無理もないか・・・

真耶「あっ、あの、お、大声出しちゃってご、ごめんね。お、怒ってる？ゴメンね、ゴメンね！でも、あのね、自己紹介、“あ”から始まって今“お”の織斑くんなんだよね。じ、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

一夏「いや、あの、そんなに謝らなくても…っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

真耶「ほ、本当ですか？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

一夏はそう言うと周りを見て。

一夏「織斑一夏です、よ、よろしくお願いします。」

すると深呼吸して

一夏「以上です。」

すると女子が何人かずっこけた。

おもしろいなと志熊は思いながら

（む・・この気配は）

するとパァン！といい音が鳴った。

織斑一夏の頭から・・・

一夏「げぇ！関羽！！」

パァン！ともう一度いい音が鳴った。

千冬「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

（関羽ね・・・女性に対してそれはないだろ・・・）

するとひゅっと志熊の頭に主席簿が来るが、パシっと受け止める。

志熊「俺がなにかしたか？」

千冬「今、変な事を考えたな？あとは教師には敬語を使え。」

（変なことだと？）

志熊「敬語については謝罪しますが、口にも出してない事で叩くのはおかしくないですか？証拠があるわけでもなしに」

千冬「顔でるからそれで読める。」

志熊「そうですか・・・つまりは顔に出てると勝手に判断してなにもないのに殴ると・・・ふざけるなよ・・・貴様みたいな奴に尽くす礼などあると思うな。」

一瞬殺気みたいなものが放たれる、それも千冬だけが感じ取れるように

千冬「す、すまなかった・・・」

千冬は怯み謝罪をすると、いきなりぽふんと頭に手を置かれ頭を撫でられた。

志熊「よく謝ったな、もういいぞ、あとすまなかったな？俺も大人気ない事して」

千冬「あ、あう／／／」

教室でしかも皆がいる前で頭を撫でられるという羞恥プレイ？の前に顔を赤くするしかないのだった。

志熊「っと、すみませんした。」

そう言って頭から手を離す。

千冬「いや、気にするな／／／」

（気持ちよかった・・・）

そんなことを思う千冬だった。

千冬「っと、そうだ山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

真耶「い、いえ副担任ですから、これくらいはしないと……」

笑顔で答えた。

千冬「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

ん？なんか矛盾してないか？まぁ、いいなどと思ってると・・・

「キャーーーーーーーーー！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に会うために北九州から来ました！」

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「千冬様・・ハァハァ・・・イイ！！」

・・・一番下・・・何がいいんだ？

千冬「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。まさか、私のところに集めているではいのだろうな？」

千冬は本当に鬱陶しいんだろうな・・・気持ちは分かるが・・・一応は人望だ大切にするがいいさ。

千冬「挨拶も満足にできんのか、お前は」

一夏「いや、千冬姉、俺は・・」スパンッ！！

千冬「織斑先生と呼べ」

一夏「…はい、織斑先生」

千冬「よし、他のものも静かにしろ。次のやつ自己紹介をしろ」

そして自己紹介は終わった、そして。

千冬　「ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事しろ」

ハーイといい返事が聞こえてくる、ここでだが断るとか言ってくれる奴とかいればおもしろいのだが・・・いるわけないか・・・無論俺はそんなことは言わない、教わる立場だしな。

そして一時限目が終わり、休み時間

一夏「改めて始めまして、俺は織斑一夏と言います。」

志熊「こちらこそ、俺は赤城志熊だ、年上だが敬語とかはいらんからな。」

一夏「そっか、わかった、それじゃよろしくな」

志熊「あぁ、せっかくの男友達だからな、仲良くしよう」

一夏「にしてもまさか千冬姉の頭撫でるとかすごいな」

志熊「あれは癖みたいなものでな・・・」

一夏「もしかしたら殴られてたかもしれないぜ?」

志熊「その時はその時だ」

その時

?「ちょっといいか?」

確か篠乃之箒だったか・・・

「「なんだ?」」

箒「あぁ、そこの・・・」

志熊「織斑か?」

一夏「一夏でいいぜ」

志熊「なら俺も志熊と呼んでくれ」

箒「でだ」

志熊「あぁ、行ってこい一夏」

一夏「んじゃ、ちょっと行ってくる」

さて、俺はこれからどうするかな・・・見世物パンダは気に入らんが波風たてるのもな・・・寝るか・・・

そして・・・2時限目の途中・・・

真耶「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

一夏「あ、えっと…」

真耶「わからないところがあったあら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

胸張って言ってるな・・・格好いいとこ見せたいのか？むしろ可愛いな・・・一般感性からすれば・・俺には・・・わからん

一夏「先生！」

真耶「はい、織斑くん！」

一夏「ほとんど全部わかりません」

なるほどな、だからか先程から苦しんでたのか・・・

真耶「え…。ぜ、全部、ですか…？他にここまでまったく分からない人はいますか？」

一夏が俺のほうを向くが・・・もともと神なんてやっているのだ・・・それも凶悪にして猛悪な邪神を

もっとも、それは人間などの知的生命体や精神生命体の尺度の話なわけだが・・・とにかく、このようなことは1秒と掛からずにマスターした。

多分、知識と理解ならここの生徒でも相当（ちょっと専門機関に行けばそれだけでＩＳ学園の教師を超えるだろう）俺は分かってると返した、そしたら一夏ががっくりした。

千冬「…織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

一夏「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパンッ！といい音がした。

千冬「織斑、必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

一夏「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと…」

千冬「やれと言っている」

一夏「…はい。やります」

まぁ、自業自得か・・・後で教えてやるか・・・甘いな・・俺も・・・

そして2時限目がおわり休み時間

？「ちょっとよろしくて？」

ちなみに今は俺が一夏に勉強を教えてる、ちなみに俺の教え方は絵を使用したり噛み砕いて説明するあとは身近にあるもので説明できそうならそういうのも活用する。

問題は中々に熱中してるせいか周りの声が聞こえないのだが・・・・

もう一度金髪の子が

？「ちょっとよろしくて？」

やはり反応はない・・・そして・・・・

バン！！と机を叩いてから

？「無視しないでいただけるかしら！？」

志熊「すまんな、確か・・・セシリア・オルコットだったか？」

セシリア「そうです、セシリア・オルコットです。」

一夏「で？何か用か？」

セシリア「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけら

れるだけでも光栄なのに、なんなんですその態度？」

志熊「ほう？どういう事だ？」

セシリア「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

そこで一夏が・・・

一夏「あ、質問いいか？」

セシリア「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏「代表候補生ってなに？」

また、周りがずっこけた・・・おもしろいな・・・

志熊「代表候補生というのはその名の通り未来の国家代表になる候補生のことだ、つまりはエリートだな」

一夏「なるほど」

志熊「いいか？言っておくが基本的に自分で調べて理解しろ、だがそれでも分からなかったら俺らを頼れ、知らない事は恥ではない・・・知ろうとしない事が恥だ。」

一夏「わかった。」

志熊「いいぞ、オルコット」

セシリア「んん、では・・そう！エリートなのですわ！」

格好つけながら言うセシリアに俺はあきれるが

セシリア「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスが同じなだけでも幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

一夏・志熊「「そうか。それはラッキーだ」」

セシリア「…あなたたち、馬鹿にしていますの？」

一夏「お前が幸運だって言ったんじゃないか・・・」

志熊「・・・面倒な奴だ・・・」

セシリア「まったくあなた達は男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい期待していたのに、まったくもって期待はずれですわね」

一夏「俺に期待されても困るんだが」

志熊「そうか・・・」

すでに半分聞いてない志熊

セシリア　「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

志熊「それは助かるな、早速だがいち・・・」

セシリア　「ＩＳのことであれば、まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試では唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから」

・・・こいつを利用するのは止めるか・・・

一夏「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うやつなら俺も倒したぞ、教官」

志熊「すごいな、一夏」

セシリア「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

驚いてるセシリアに

一夏「女子だけではっておちじゃないのか？」

（オルコットの精神に亀裂が入った。）

一夏の追撃の一言であった。

セシリア「あなたが教官を倒したって言うの！？」

一夏「うん、まあ。たぶん」

志熊「多分だと？」

一夏「いや～、だから、たぶん倒した」

セシリア「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

一夏「落ち着け？な？」

セシリア「これが落ち着いていられますか！」

それと同時に3時限目のチャイムがなった。

セシリア「っ…！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

志熊「これは・・・面倒な事に・・なった・・・」

一夏も同じような台詞を言った。

3時限目の授業

この時間は千冬が教壇に立っている、ちなみに真耶は教室の後ろのほうでメモを取る準備をしていた。

千冬「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明すると、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬が言う。

千冬「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな」

面倒そうだな・・・まぁ、黙っとけばいいか・・・

女子A「はいっ。織斑くんを推薦します！」

女子B「赤城さんを推薦します。」

千冬「では候補者は織斑一夏と赤城志熊…他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

一夏「お、俺！？」

まぁ、そういう反応するな、こいつは。

千冬「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？」

一夏「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」

千冬「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無い」

志熊「まぁ、諦めろ・・・この先生に何を言っても無駄だ」

千冬「他にはいないか？いないならこの二人の中から選ぶぞ」

む、他に誰かいないものか・・・すると、セシリアが机をバンッと机をたたき立ち上がる

セシリア「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？

実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

猿か・・・その猿に振り回されてる世界はなんなのだろうな？

セシリア「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で―」

一夏「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

セシリア「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

志熊「二人とも少し落ち着け、それにオルコットが最初に日本を侮辱しなければお前の国も侮辱されなかったのだぞ？」

セシリア「決闘ですわ！」

口論での旗色が悪くなったから決闘か・・・子供らしくていいな、あ・・俺も巻き込まれてるのか・・・などと思ってると

一夏「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

セシリア「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

一夏「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

セシリア「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

（元気いいなこいつら・・・さて・・・寝ながら授業受けるか・・・）

一夏「ハンデはどのぐらいつける？」

セシリア「あら、早速お願いかしら？」

一夏「いや、俺がどのぐらいハンデをつけたらいいのかなーと」

すると教室に爆笑が巻き起こる。

少女Ａ「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

少女Ｂ「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

少女Ｃ「織斑くんたちは、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

少女Ｄ「しかも、もし男女間で戦争が起きたら男性陣は三日と持たないと言われてるんだよ」

その反応に俺は少し灸を据えるために怒気を少し入れて

志熊「本当にそう思っているのか？だとしたら貴様らは本当にめでたい精神をしているのだな。」

少女E「どういうこと？」

志熊「いいか？戦争というのはそんな簡単に勝ち負けが決まるわけではない。
確かにISは優秀な兵器だろう・・・だが、戦争は正面から堂々と戦うわけではない。
暗殺や誘拐といった事から経済制裁や資源の供給ストップなどいくらでも方法はある。
例えば、お前はもしも男と女が戦争したとして家族や大切な人が人質になったらどうする？」

少女A「それは・・・」

志熊「それに僅か467機しかISは無い、それしか無いのに戦争をカバーできるわけないだろ？少し考えれば分かる事だ。
それに、ISに対する戦術も戦争中にできるだろうしな。
それらを考察して男が女に戦争をして負ける道理は無いという事だ。
あと、ISはアラスカ条約があるとしても根本は兵器だ、勘違いするな。
そして、それを覚悟しろとは言わない・・・頭の隅にでも置いとけ、以上だ」

千冬「赤城の言う通りISは兵器だそれだけは覚えておけ、では来週の月曜日に放課後第三アリーナでクラス代表の件は行う。赤城、織斑、オルコットは準備しておけ。では、授業を始める。」

こうして授業は進んでいった。

入学式（後書き）

読んでくれて有難うございます。

長すぎたりしてないでしょうか？

それでは今日は失礼します。

異界からの王と事故（前書き）

今回はオリジネルストーリーが混ざります。

それでは始まります。

異界からの王と事故

今は昼休みである。

箒「私はあの人とは関係ない！！」

篠乃之が大声を出し教室の空気が一瞬悪くなるという事以外はたいした事もなかった。

ちなみに篠乃之箒は篠乃之束の妹である。

（あの姉妹は仲が悪いのか？まぁ、俺がどうこうする問題ではないが・・・）

志熊「一夏、飯を食いに行かないか？」

一夏「あぁ、そうだ！箒も誘っていいか？」

志熊「構わんぞ？」

一夏「サンキュー」

一夏は篠乃之を誘いに行ったが気づいたら投げられていた・・・・

志熊「ほう・・投げ方としては悪くないな。」

その後学食にて・・・

一夏「なぁ、箒、お前がＩＳについて教えてくれよ」

箒「わ、私がか！？」

一夏「千冬姉に教わってもいいんだけど千冬姉ぇは忙しいだろうし身内びいきって思われても困るしな」

志熊「篠乃之、いいのではないか？教えるのもまた勉強になるしな。」

箒「し、しかし・・・」

すると一人の女子が話しかけてきた

女子「ちょっといいかな？」

その女子はリボンの色が違っていた。
つまりは上級生である。

女子「君達がうわさの男子生徒君達でしょ？イギリスの代表候補生と試合することになったっていう」

一夏「えぇ、そうですけど？」

女子「君達ってＩＳの機動時間ってどのくらい？」

一夏「多分、３０分くらいかと・・・」

志熊「俺は１時間くらいか（実際は０分だな・・・俺のＩＳは待機形態からずっとこのままだしな・・・反応はあるが動かないと・・・）」

女子「それじゃあ代表候補生には勝てないよ。代表候補生は機動時間3桁はいってるから。ねぇ、よかったら私がＩＳについて教えてあげよっか？」

一夏「助かります。それじゃあ・・」

箒「結構です。私が教えることになっていますから」

女子「でも、あなたも1年生でしょ？そしたら上級生の私が教えたほうがいいんじゃない？」

箒「私は！篠ノ之束の妹ですから」

女子「っ！？そう・・それなら大丈夫ね」

するとその女子は去っていった。

一夏「箒お前が教えてくれるのか？あんまり乗り気じゃないみたいだったけど・・・」

箒「うるさい！・・・それより剣道の腕がなまってないか確かめてやる。放課後剣道場に来い」

一夏「いや、俺はＩＳの事を教えてほしいんだけど・・・」

志熊「いや、案外いいのではないか？ＩＳの動きは操縦者の動きがダイレクトに伝わるからな」

一夏「わかったよ」

志熊「まぁ、知識は俺がなんとかしてみる」

一夏「頼む」

そして放課後・・・・

箒「・・・どういうことだ？」

一夏「どういうことっていわれても・・・」

箒「なぜ！どうしてここまで弱くなっている！？」

志熊「箒（食堂で箒と呼んでくれと言われた。）責めるのは構わんが・・・一夏をここで潰すなよ？」

その後箒に散々に扱かれた一夏であった。

帰り道にて志熊と一夏は山田真耶の呼び止められていた。

真耶「織斑君、赤城君、ちょっといいですか？」

一夏・志熊「「なんですか？」」

真耶「貴方たちの部屋割りが決まったので伝えにきました。」

一夏「え？でも、俺は一週間は自宅から通学のはずでは？」

志熊「誘拐とかの対処だろう。（俺はあの部屋でも構わないが・・・）」

ちなみに志熊が今までいた部屋は所謂取り調べ用の部屋である。

一夏「でも、荷物とか取りに行かないと」

千冬「安心しろ、それは私がやっておいた。
服と携帯の充電器と小物があれば十分だろう。」

一夏「・・・ありがとうございます・・・」

娯楽が一つも無いのが不満な一夏であった。

志熊「っ！！？・・・・悪いが、一夏は先に帰ってくれ。
俺は忘れ物をした。」

一夏「わかった。」

真耶「それでは寄り道しないで下さいね？」

ちなみに学校から寮まで５０メートルくらいだ寄り道するところなど無い。

そして校舎に戻った志熊は

志熊「出て来い・・・すでに分かっている。」

？「そうか、流石はルシファーの友だ。」

志熊「貴様は誰だ？」

？「我が名はアンリ・マンユだ。ルシファーが治める魔界とは別の魔界を統治している。」

志熊「ほう？それでそのアンリ・マンユがなんの用だ？」

アンリ「なに、貴様の力が知りたくてな・・・ゆくぞ！！」

言い終わると同時にアンリ・マンユは地面から無数の紫色の氷柱を生やした。

それは志熊に当たる前に全てかき消された。

そう、志熊の術によって。

志熊「イマジンキャンセラー・・・所謂魔術等に対するカウンタースペルだな。
次は俺の番だ・・・暴餓龍・・・創造・・・神喰の槍！！」

そう言うと志熊の手に禍々しい黒に赤いスジが入った西洋風の槍が現れた。（モデルはクロスボーンガンダムＸ２のショットランサー）

志熊「ふっ！」

常人では見る事が出来ない速度で突撃を仕掛ける志熊、速度は軽く超音速の領域だろう・・・衝撃波は魔術で消し去っているので影響はない。

アンリ「なるほど・・・確かに弱体化したな・・・だが、この世界で過ごすには十分すぎるな。」

槍とアンリ・マンユの爪が何度も交差する。
秒間で１００回以上の交差をするほどの戦闘が一時間半ほど続いた時に。
志熊「槍よ・・・敵を穿て！！」
槍が甲高い音を出しながら回転する。
そして、今までで一番早い速度で突貫する志熊・・・それはアンリ・マンユを貫きそして・・・ただいま絶賛入浴中の大浴場に突っ込む事になった・・・・
バガーン！！！
志熊「奴は分霊だったか・・・まぁ、倒せたのだからよしとするか・・・」
？「ほう？何がよしなんだ？」
志熊「む？・・・・あぁ、なるほどな、奴の策に嵌ったか？」
するとキャーーーーーーーーー！！！！！
と女子の声が聞こえた。
志熊「すまんな、千冬先生、壁を壊してしまった。」
千冬「それよりも・・・さっさと出てけ！！」

ゴスッ！と志熊の鳩尾に拳が当たった・・・もっとも、身体の強化のせいで志熊にダメージは一切無いのだが・・・

そして、部屋に着くと・・・

志熊「なかなかの部屋だな、監視カメラや盗聴器もないな。」

志熊は一人部屋で一夏と箒の隣である。

志熊「そういえば、先程隣の部屋のドアを見たら穴だらけだったな。」

コンコン・・・

志熊「誰だ？」

ガチャ・・

千冬「ちょっといいか？」

志熊「あぁ・・」

千冬「先程の事だが・・・何があった？」

志熊「力試し？ってところか・・・”こちら側”の事だから干渉しないほうがいい」

千冬「・・・だが、壁の件はそうもいかんぞ？」

志熊「それは後で直しておく」

千冬「どうやってだ？」

志熊「魔術でだ」

千冬「見てもいいか？」

志熊「・・・（まぁ、あの魔術くらいなら問題ないか・・・）いいぞ」

千冬「では、後でな」

バタン・・・

志熊「さて、少し調べるとするか・・・オルコットの事でも・・・な」

しばらくして・・・ジャージ姿の千冬とともに壊れた壁のところへ来ていた。

普通に考えれば超音速で突っ込んできたら壁が壊れるどころではないが、アンリ・マンユのせいで威力が減殺されあの程度の被害で済んだのだった。

千冬「それで、どうやるんだ？」

志熊「簡単だ・・・時よ巻き戻れ・・・」

まるで逆再生するかのように壁に破片がはめられて元に戻っていく。

千冬「・・・すごいな」

志熊「まぁ、時間関係は基本的に難しいからな（人間から見ればだが）」

千冬「他にも直せたりできるか？」

志熊「便利屋にはならないぞ？」

千冬「別にいいだろ？風呂に入ってきたのだしな」

志熊「１回だけだ・・・」

千冬「あぁ、分かった」

こうして夜は過ぎていった・・・

次の日に一夏に専用ＩＳが来るという情報が来た。

一夏「俺専用ＩＳかぁ・・どんなのかな？」

千冬「さぁな、私のところには情報は無いからなんとも言えんな」

箒「とりあえず剣道場に行くぞ！」

志熊「行って来い」

千冬「お前は行かないのか？」

志熊「俺は俺のＩＳの事で手一杯なんでな」

千冬「動かなければ訓練機でやるしかないな」

志熊「そう・・だな（訓練機はラファールが使えればいいが）」

そしてすぐに決闘の日が来た。

異界からの王と事故（後書き）

今回はちょっと短いですかね？

長さは気分で変わりますのでご了承ください。

蒼い涙と白と外なる神と（前書き）

セシリア対志熊です。

戦闘が下手ですがよろしくお願いします。

蒼い涙と白と外なる神と

クラス代表決定戦当日

志熊「さて、これからどうするか・・・ん？あいつらはどうしたんだ？」

一夏「なあ、箒」

箒「なんだ、一夏」

一夏「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

箒が目を逸らした。

一夏「目　を　そ　ら　す　な」

志熊「まぁ、一応は知識は入れただろ？」

一夏「そうだけどさ・・・」

そう、志熊は一夏にあの分厚い教本の内容を一夏の頭に入れたのだ。

志熊「それに、剣道の稽古ももしかしたら役に立つかもしれんぞ？」

箒「そうだぞ！一夏」

一夏「分かったよ」

箒「にしても一夏のＩＳはいつ来るのだ？」

一夏「さぁ？」

志熊「仕方ない、俺が先に行くか」

一夏「ん？志熊ってＩＳあったっけ？」

志熊「あぁ、もっともちゃんと動くか心配だけどな・・・」

一夏「おいおい、大丈夫か」

志熊「まぁ、なんとかする・・それでは行ってくる」

一夏「あぁ、買ってこい！」

志熊「（ＩＳ・・・起動・・・）・・起動したか・・・」

志熊のＩＳははっきり言って異様であった・・・先程からのた打ち回りながら志熊の肩の横で浮いてる黒い物体があるだけである。

志熊「赤城志熊・・・出るぞ！」

カタパルトには乗れないので浮いてそのままアリーナへ向かう。

セシリア「あら？逃げずに来ましたのね？それにしてもなんですか？そのＩＳは？」

志熊「まぁ、実験機だからな・・・」

セシリア「まぁ、いいですわ、それよりも・・わたくしが勝つのは自明の理ですわ。
ですから、今ここで泣いて謝れば許してさしあげますわ」

志熊「・・・・」

セシリア「聞いてますの？」

志熊「・・・・」

セシリア「無視とはいい度胸ですわね・・・潰してさしあげますわ」

そうセシリアが言うと試合開始のブザーが鳴った。

まずはセシリアのＩＳブルー・ティアーズが持つレーザーライフルスターライトＭＫ－？を放ってくる、
それをギリギリで回避する志熊である。

志熊「ちっ・・・思った以上に性能が低いな・・こいつは・・しかも俺とこいつで動きの齟齬がある」

セシリア「どうしましたか？あなたの実力はその程度ですか？」

志熊「とりあえずは武器なり盾なりないとな・・・武器も盾も無いだと？」

ブルー・ティアーズから放たれるレーザーを回避しながら考える。

（武器も無く機体性能も量産機を遥かに下回る・・・か・・・第一世代にも勝てない性能だな）

セシリア「避けるのは上手いみたいですね、これではどうですか？さぁ、踊りなさい！セシリア・オルコットとブルーティアーズが奏でる円舞曲を！！」

するとブルーティアーズのリアスカートから４基のビットが放たれた。

志熊「くっ！」

避けきれずに少しづつ被弾する志熊の機体

（あいつは常に死角を攻撃するように配置しているな・・・それに、多分だが・・・誘導してみるか・・・）

志熊「そのビット操ってるときは自身は攻撃できないのだな？」

セシリア「よくわかりましたわね？」

志熊「ビット動かしてる最中にお前からの攻撃がないからな。嫌でも分かる」

セシリア「ですが分かったところで攻略できなければ意味ありませんわ！」

志熊「今だ・・・」

志熊がそう言うとブルー・ティアーズのビットを踏み台にして一気に接近した。

セシリア「残念、ブルーティアーズは六基ありましてよ！」

志熊「それも予測済みっ！なんだと・・・」

志熊の動きに志熊のＩＳがついてこなかったのだ。

ズゴーン！！！ミサイルが直撃したのか煙で前が見えない・・・

千冬「ふむ、機体に救われたようだな・・・」

煙の中から現れたのはデモンベインの大十字九郎の魔術師（マギウス）スタイルのような服装に包まれた志熊の姿があった。

志熊「やっと一次移行したか・・・」

セシリア「まさか初期状態で戦っていましたの？」

志熊「あぁ、しかも武器なしでな」

セシリア「なんですって？」

志熊「まぁ、安心しろ・・もうそれも解消されたからな・・・あと、このＩＳの名前も今分かったから教えてやる。こいつの名前は・・・ネームレス・アバターだ」

セシリア「ネームレス・アバター・・・名も無き化身？」

志熊「名も無き化身・・だからなににでもなれる・・・アバターシステム起動・・・他世界、平行世界情報取得・・・使用気体決定！ＺＧＭＦ－Ｘ６６６Ｓレジェンド・ガンダム！！」

志熊がそう言うと灰色と青と赤のトリコロールカラーの機体が現れた。

背中には円形の何かを半分に割ったようなユニットに姿勢制御用の羽みたいなものがついていた。

志熊「さて・・・これはお前の土俵の機体だ、この世界でいうＢＴ兵器を搭載している。」

セシリア「ですが、ＢＴ兵器に関してはこちらに一日の長がありましてよ！」

志熊「そうだな、だが、俺はすでにこの機体を全てしている・・ドラグーン！」

そう志熊が言うと背中の六基の羽みたいなビットと2基の円錐状のビット、さらに腰のビットを飛ばした。

ちなみに羽みたいなドラグーンと呼ばれるビットは一基につき砲門は2門あり数は八基ある。

円錐状のドラグーンは九門の砲門があり2基存在する。

さらにビームライフルを装備しているので合計で３５の砲門に狙われるのである。

さらにブルー・ティアーズとは違いレジェンドはドラグーンをコントロールしながら自機も操作できるのである。

さて、そんな機体の前にセシリアは驚愕するしかなかった。

志熊「ビームの出力はＩＳ用に設定してあるのか、まぁ、普通に使ったらセシリア死ぬからな。」

そう、志熊の使う化身機体は基本的に武器の威力が高すぎるために出力を相当落としているのだ。

普通の出力で撃つと絶対防御を易々と貫くのだ。

志熊「ではいくぞ」

セシリア「っ！？」

志熊の合図を切欠に全てのドラグーンが立体的にそして縦横無尽にビームの雨を降らす。

セシリア「あああああっ！！」

セシリア避けようとするが努力むなしく次々と被弾しシールドエネルギーを削っていった。

志熊「これで終わりだ」

そう言うと上下両方にビーム刃がでるビームサーベルと出し突貫する。

セシリア「なっ！？はやっ！！」

レジェンドがブルーティアーズと一閃するとブルー・ティアーズの

シールドエネルギーが0になった。

セシリア「あ、落ちる・・・助けて・・・」

落下するセシリアを志熊が受け止める。

いるまでたっても地面に激突しないので恐る恐る目を開けると

志熊「起きたか？」

セシリア「え？あ・・わたくしは・・？」

所謂お姫様抱っこの状態にセシリアは

セシリア「あ、あ、」

志熊「どうした？どこか痛いのか？」

セシリア「いえ・・・大丈夫です・・・／／／」

志熊「そうか・・・一応俺が一番の年長者だから言っておく、これ以上自分を裏切る行為をするな。」

セシリア「え？」

志熊「お前が今の地位を掴むために相当努力したのだろう、それは認める。
だが、あのような発言や態度は今の地位を脅かす行動だ、それはここまで築き上げてきた努力を無駄にする。
だから、そのような行為はするな。」

セシリア「はい」

志熊「分かればいい」

そう言ってセシリアの頭を撫でる志熊

セシリア「（あ、気持ちいいですわ／／／）」

そしてピットに着くと頭を撫でる手を下ろす。

セシリア「あ・・」

志熊「ん？どうかしたか？」

セシリア「いえ、なんでもありませんわ」

志熊「そうか」

次は一夏対セシリアであったが一夏が敗退した。

そして最後の戦いは志熊対一夏だ。

一夏「最後は志熊とか」

志熊「悔いだけは残すなよ？」

一夏「そっちこそな、そういえばあのレジェンドってので戦うのか？」

志熊「いや、今回はお前の土俵で戦ってみようと思う」

一夏「俺の土俵？」

志熊「あぁ、見てろ・・・システム起動・・・工程省略・・・使用機体・・ＯＺ－１３ＭＳガンダムエピオン！！」

一夏「なっ！さっきと違う機体なのか？」

志熊「あぁ、こいつはガンダムエピオンと言って射撃武器が一切ない格闘戦専用の機体だ。」

一夏「すげぇな・・・」

ガンダムエピオンは紅と黒と白のトリコロールカラーで胸に緑色の玉が付いている。

背中には翼を彷彿とさせるスラスターが付いている。

志熊「いくぞ」

一夏「来い！！」

それと同時に突進するエピオン。

一夏「っ！？」

一夏はまったく反応できなかった、そしてモニタールームでは

千冬「なんだ・・・あれは・・・カメラの解像処理が間に合わない

だと!?先程の機体といい今の機体といい・・・化け物か・・?」

箒「圧倒的すぎる・・・」

真耶「あれは一体なんなのでしょうかね?」

千冬「後で奴から聞かせてもらうとするか」

一夏「一体何をしたんだ?」

志熊「あぁこれだ」

一夏「なんだそれ?」

志熊「ヒートロッドと言って熱で相手の装甲を切る蛇腹剣と鞭の中間みたいな武器だ。これはエピオンのシールドに内臓されている」

一夏「なるほどな・・・」

志熊はエピオンで約マッハ5．5つまりは極超音速で切り抜けたのだ。

一夏「なら、次はこっちの番だ!!」

そう言うと一夏の白式が突っ込んでくる

志熊「甘い、単純に突っ込めばいいというものじゃない」

一夏「なら、これでどうだ!」

志熊「それも読める」

一夏「くっ！まだまだぁぁぁ！！」

志熊「そうだ、諦めるな、来い！」

一夏「うおおおお！！」

真耶「はぁ～すごいですね、二人とも」

千冬「いや、あれは志熊か一夏に訓練をつけてるだけだ」

それから数十分後・・・

千冬「そろそろ決着をつけろ」

アリーナに千冬の声が流れる。

志熊「そうか、ならば名残惜しいがこれで終わりにする。」

一夏「なら俺も・・・零落白夜発動！！」

すると雪平弐型の刀身が割れ中からエネルギー刃が出る。

そして志熊のエピオンもまた大出力ビームソードを取り出す。

そして双方の光の刃がぶつかる。

一夏「嘘だろ？零落白夜が押されてるだと？」

志熊「エピオンのビームソードは威力が高すぎてＩＳなど絶対防御を豆腐のように切ってしまうほどだ。
だから、出力を落としたのだがそれでも危ないからビーム刃の安定維持能力に回したのさ。
それでも零落白夜よりも性能は上なのだがな。」

一夏「・・・ぐぅ・・そうかよ・・・」

志熊「はあ！！」

志熊が力を込めると零落白夜が切り裂かれ白式も同じように切り裂かれた。

試合終了後・・・

千冬「ちょっといいか」

志熊「あぁ、いいですよ」

更衣室のドアを開けるとそこには半裸の志熊がいた。

その身体は筋肉質でありながら嫌味のない体をしていた。

千冬「おい、ちゃんと着替えてからいいと言え」

志熊「？あぁ、分かりました」

志熊は分かっていないようだった。

志熊「それで、一体なんの用ですか？まぁ、俺のＩＳの事だとは思いますが・・・」

千冬「その通りだ・・ネームレス・アバター、あれは一体なんなんだ？」

志熊「あれは普通のＩＳではありません」

千冬「それは分かってる」

志熊「あれのワンオフ・アビリティーはアバターシステム」

千冬「アバターシステム？」

志熊「えぇ、俺のＩＳはあらゆる世界、つまりは他の次元の世界や平行世界、さらには過去・現在・未来から情報を汲み取ってそのオリジナルに限りなく近い性能の機体になる能力です。ただ、今は制限があるのかある一定以上の性能の機体は無理なのですが。」

千冬「・・・なんというか・・・出鱈目なＩＳだな・・・」

志熊「そうですね」

千冬「もしかするとお前を取り合って戦争が起こるかもしれんな」

志熊「まぁ、その時はその時ですよ」

千冬「楽観視しすぎだ」

志熊「そうですね、ですが、未来は分かりませんから（本当はある程度は分かるのだが）」

千冬「さて、そろそろ私は行くぞ」

志熊「分かりました」

セシリアの部屋

セシリア「赤城・・・志熊・・・」

セシリアはシャワーを浴びながら今日のことを思い出していた。

セシリア「（そういえば、父は母の顔色を窺ってばかりでしたわね）」

セシリアの記憶には自身の父親が弱々しい態度でいたことを思い出す。

セシリアの母親は女尊男卑の前からいくつもの会社を経営し、成功を収めていった人だった。厳しかったが、憧れの人だった。

だが父は母の顔色を窺ってばかりだった。

ＩＳが出て女尊男卑の社会になってからはさらにそれが顕著になった。

そんな父を見てきたから男が嫌になり始めていた、そして3年前にその父と母は大事故によって他界してしまったのだ。

そして残されたのは莫大な遺産。

そしてそれに群がる金の亡者達。

パーティーなどがあればセシリアの遺産を取ろうとする者、媚び諂い取り入ろうとするもの。

結婚の話も出てきたが、亡者達の本性を知ってるセシリアには苦痛でしかなかった。

だから、セシリアは努力した・・・そして国家代表候補生となって遺産を守ることができた。

だが、そのせいなのだろうか？自身は相手のことをよく知らずに自分の勝手な思い込みによって格下だと決めつけていくようになったのは。

セシリアはもう一度、自分の憧れていた母親を思い出す。すると自身の母親は相手を一方的に見下してなどいなかったことを思い出す。

セシリア「わたくしは一体何をしてきていたのでしょう・・・母はちゃんと相手の評価が出来る人なのに）」

セシリアは理解した。

セシリア「（まだ、間に合いますわよね？セシリア・オルコット）」

そしてセシリアはまた赤城志熊を思い出す。

セシリア「（赤城志熊・・彼の瞳は意思に満ち溢れていた、まるで折れない剣のごとく・・・そして・・・灼熱太陽すらも霞むほどに・・・それに穏やかな優しい瞳も・・・その穏やかな瞳は春の暖かな風のような・・・わたくしは彼が知りたいですわ・・・）」

そしてセシリアの胸がトクンと高鳴るのだった・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6923z/

外なる神とＩＳ

2011年12月24日07時47分発行